

教 育 研 究 業 績 書

平成 20 年 1 月 6 日

氏 名 松田 義幸

教育上の能力に関する事項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 実践女子大学 2) 多摩大学 3) 筑波大学	平成 17 年 4 月 ～ 平成 19 年 3 月 平成 6 年 平成 2 年	<p>【地域振興プロジェクトへの学生参画によるプロジェクト連動研究の実践】 伊勢志摩観光の振興プロジェクトに、学部生を参画させ、“OJL (On the Job Learning) “を通じた卒業研究を实践</p> <p>【オリエンタルランドとの共同プロジェクト型演習の実践】 プロジェクト形式による TDR 研究と研究成果のオリエンタルランド幹部社員への発表会を通じた交流機会の創出による成果発表の实践</p> <p>【地域博物館活動を通じた実践研究】 山形県西川町の「月山カモシカ学園」活動を通じた実践的研究指導</p>
2 作成した教科書、教材 1) 「スポーツ産業論」 2) e-ラーニングコンテンツ 3) 「レジャー産業を考える」	平成 8 年 2 月 平成 9 年～ (継続中) 平成 5 年 6 月	<p>同書は、筑波大学大学院スポーツ産業寄附講座における教材資料をまとめた書籍であり、スポーツ産業教育に関する参考文献として高い評価を得ている。</p> <p>森永エンゼル財団と共同による e-ラーニングコンテンツ並びにシステム (エンゼル・カレッジ) を開発し、授業内利用のマルチメディアコンテンツ並びに、システムを授業公開に活用した。(実践女子大学)</p> <p>多摩大学経営情報学部生向けレジャー産業論標準テキストとして執筆。</p>
3 当該教員の教育上の能力に関する大学の評価		
4 実務家教員についての特記事項		日本経済新聞社、余暇開発センターにおける実務経験に基づく産官学+学生参画型プロジェクト授業を得意とする。
5 その他 1) ファカルティディベロップメント推進 (実践女子大学)	平成 16 年 4 月 ～平成 18 年 3 月	FD 推進プロジェクトのリーダー。FD のあり方を QC 活動に原点を整理し直し、普及・実践に貢献。
職務上の実績に関する事項	年 月 日	概 要
1 資格、免許		特になし
2 特許等		特になし
3 実務家教員についての特記事項		特になし
4 その他		特になし

著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 産業広告戦略	共 著	1966年9月	東洋経済新聞社	<p>共著者 八巻俊雄 松田担当執筆</p> <p>第1章 生産財市場とマーケティング (pp1-18) 第2章 産業広告の必要性とその背景 (pp19-50) 第6章 媒体資料と選択 (pp175-214) 第7章 産業広告の効果測定 (pp215-244)</p> <p>(内容) マーケティングはアメリカにおいて発達したものであるが、1960年代に入るとConsumer's marketingとindustrial marketing が体系化される。後者を生産財マーケティング、そのサブシステムのindustrial advertisingを産業広告として日本の市場に合わせて体系化した著書。 生産財市場の需要者は、法人であるためにConsumer's marketingの方法よりも複雑である。個人の行動傾向に対し、組織の行動傾向であるからである。生産性、能率性、効率性を追求する組織行動に適合する市場創造をいかに計るか、そのためのコミュニケーション活動(広告活動)をいかに図るかを記述。</p>
2 広告システムアプローチ	共 著	1968年1月	誠文堂新光社	<p>共著者 八巻俊雄 松田担当執筆</p> <p>第4章 企業目標・マーケティング目標、広告目標 (pp63-69) 第5章 広告目標の明確化 (pp88-121) 第6章 広告予算の設定からプリテストまで (pp175-214) 第7章 広告効果測定の手順 (pp122-158) 第8章 実例に見る広告効果のシステム・アプローチ (pp159-236)</p> <p>(内容) 企業目標は環境変化に対する適応、マーケティング目標は目標市場占拠率の達成であるのに対し、広告目標はコミュニケーション目標 (share of mind) の達成にある。そのために、購買プロセス(心理プロセス)にコミュニケーション目標を設定し、目標達成のための広告媒体選択と広告表現を決定する。実際の広告活動が当初の目標達成に向けて効果をあげているか、plan-do-seeのフィードバックを図らなければならない。モービル、IHI、宇部興産のケース分析で、産業広告の効果を明らかにしている。</p>

著書・学术论文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 計量広告学	共 著	1968 年 4 月	誠文堂新光社	<p>共著者 青柳寿子 松田担当執筆</p> <p>第1章 広告の経済学 (pp1-18) 第3章 企業目標は利益か売上高か (pp101-124) 第5章 消費社行動の分析 (pp175-214) 第6章 CMタレントの商品学 (pp215-244)</p> <p>(内容) 広告活動を数学モデルに基づいて解説した著書である。 広告は、需要を創造するのか (マクロ分析)、市場集中を促進するものなのか (ミクロ経済分析)、そして企業行動は利益の最大化に目標をおくものなのか (W. J. ボーモル)、それぞれの場合における広告の生産曲線を設定できと仮定する (W. アルダーソン)。ソースタイン・ヴェブレンの「レジャー・クラス」で指摘された誇示的效果やJ. S. デューゼンベリーの消費面に現れるデモンストレーション効果の考え方を、日本の消費市場に応用し、社会調査によって検証した。</p>
4 意思決定とシステム	共 著	1972 年 5 月	日本経済新聞社	<p>共著者 菅波三郎 松田担当執筆</p> <p>I 調査データの訴え (pp9-24) II 主観と客観の融合 (pp25-38) III 市場データの豊かな読み方 (pp39-54) IV データの関連性 (pp55-68) V 市場情報の合成 (pp69-84) VI 情報選別の技術 (pp85-102) VII 変動要因の抽出 (pp103-116) VIII 交互作用の扱い方 (pp117- 130) X 一連のつながりの洞察 (pp145-160) XIII むすび; 意思決定とシステム (pp177-204)</p> <p>原則として松田が執筆し、菅波 (OR: 日本大学客員教授が監修)</p> <p>(内容) マーケティング・リサーチ分野におけるOR技法 (Operations research技法、ベイズ流アプローチ、クロス分析、多変量解析、マルコフ・チェーン、LPなど) を日経広告研究所のプロジェクトに応用したケースを用いて解説。</p>

著書・学术论文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 質の時代	単 著	1980年6月	三笠書房	<p>全体がクオリティ・ライフの方法と人間回復への道の2部構成。余暇開発センターにおいて担当したプロジェクトの成果、国際レジャー会議へ参加した研究成果をまとめたもの。</p> <p>1部：クオリティ・ライフの方法。 ワーカーホリックといわれる日本人も、所有価値（to have）から存在価値（to be）に気付きはじめている（E. フロムの考え方を参考に記述）（第1章）。 人生80年と寿命が長くなり、また自由時間が拡大し、スポーツを楽しもうというクオリティ・ライフ（心の回復）これは「心・技・体」の回復といってもよい（第2～5章）。 2部：人間回復への道。 日本人の生き甲斐の構造を「労働と余暇」の関係から明らかにし、労働の人間化と余暇の人間化をいかに図るか（第6章、第7章）。それにはタイム・バジェットをリニア型からリカレント型へ転換し、その生活時間の受け皿として学習社会を構想すべきであることを指摘（第8章）</p>
6 レジャー産業	共 著	1980年10月	東洋経済新聞社	<p>共著者 齋藤精一郎 松田担当執筆</p> <p>2 生活時間の配分が消費構造を決める (pp19-40) 3 進む生活行動のレジャー化 (pp41-58) 4 日本人のライフスタイル (pp59-74) 5 日本人のレジャー行動 (pp75-104) 6 レジャー産業の市場構造 (pp105-136) 7 レジャー産業の展開方法 (pp137-160) 8 多様展開を迎えたレジャー産業(pp161-219)</p> <p>(内容) 余暇開発センターの研究成果をもとに、レジャー産業市場の需要構造（消費関数、家計分析、ライフスタイル分析）、また供給構造（レジャー産業の業務領域、マーケティング領域）を明らかにしている。</p>
7 現代余暇の社会学	単 著	1981年4月	誠文堂新光社	<p>人生80年、タイムバジェット70万時間の人間化（humanization）をいかに図るか（序章）。 これまでの「働きがい イコール生きがい」から、労働（QWL: Quality of Working Life）、余暇（QLL: Quality of Leisure Life）、家庭（QFL: Quality of Family Life）のバランスのとれた生活の質（QOL: Quality of Life）の改善をいかに図るか。QOL=f（QWL, QLL, QFL）の関係式を仮説にして、社会調査法によって、日本人のQOL構造を解析。これからQLL, QFLの充実がQOL改善に寄与する可能性のあることを指摘（第1、2章）。 しかし、国際比較調査に見る日本人のレジャー生活の実際は消極的で、レジャー活動選好も単調である（第3章）。 なぜ日本人のレジャー生活は貧しいのか。戦後繁栄した消費文明の延長にレジャー生活が位置づいているからでいいのか（第4章）。 いかにして、レジャー生活の人間化を図るべきか（第5、6、7章）。</p>

著書・学术论文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8 ボク母さんのロボットじゃないよ	共著	1983年10月	日本経営出版協会	<p>共著者 我妻洋、福島章 松田担当執筆</p> <p>第I章 親の世代、子の世代（三人の討論） (pp5-52)</p> <p>第IV章 家族の心をつなぐもの ライフサイクルから見た余暇の過ごし方 (pp155-202)</p> <p>(内容) 討論では、人間のシンボル性、教養の大切さについて指摘。 第IV章は、老後の世界をいかにすれば人生の完成に向かわせることができるかを、レクリエーションからレジャーへという流れで解説。 親子のレジャーでは、ノンバーバル・コミュニケーションの大切さと実際例について加山雄三家をモデルに解説。労働とレジャーと家庭生活のバランスのために、レジャーとしての生産活動の重要性を指摘。それによって豊かな家庭機能の回復を図ることができるのではないかを展望する。</p>
9 生活文化の社会学	共著	1984年4月	誠文堂新光社	<p>共著者 中田裕久 松田担当執筆</p> <p>第1章 なぜライフプランニングなのか (pp12-27)</p> <p>第2章 ライフプランニングの理論 (pp28-56)</p> <p>第3章 ライフプランニングの演習 (pp57-90)</p> <p>第4章 生活文化の創造と楽しみ方 (pp91-122)</p> <p>(内容) 人生80年時代の食文化、衣文化、住文化、遊文化の「生活文化」の創造と享受はいかにあるべきかを、社会学、マーケティング科学、消費経済学、社会心理学、生活学、住居学から考察。 人生80年時代の生活文化の構造を把握し、計量モデルで表現。次にこのモデルを利用して、限られた時間・所得資源を、幸福の追求に向けていかに配分すべきかをシュミレーションする。生涯欲望と生涯所得をバランスさせるために、浪費的欲望をいかに縮小するかを学ぶ</p>
10 観光文化と奥の細道	共著	1986年6月	誠文堂新光社	<p>共編者 外山滋比古 共著者 芳賀徹、佐藤和夫、ドナルド・キーン、尾形功、湯浅信之、川崎展宏、藤岡和賀夫、後藤仁、富士昌寿等 松田担当執筆</p> <p>第3章 1つの実験「奥の細道」大学構想 (pp34-50)</p> <p>第13章 文化の時代の地域開発の基本姿勢 (pp286-299)</p> <p>(内容) 日本人のレジャーとしての旅の質をいかに高めるか。量の拡大としての旅は一過性で終わりやすいため、旅が幸福の追求に結びつかない。平成元年の奥の細道紀行300年祭に向けて、奥の細道のゆかりの土地の人々が協力して、俳句の世界を国際化しながら、質の高い旅へのムーブメントを展開した記録。</p>

著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 1 日本人の品格	共 著	1986年11月	PHP 研究所	<p>共著者 渡部昇一、土居健郎、谷澤永一、木村治美 松田担当執筆 第5章 レジャーと品格 (pp157-205) (内容) 生きがいとしての勤労とそれを祝う祭りを500年間にわたって継承してきた山形県庄内地方の黒川能を取り上げ、そこに晴耕雨読の創る人間の品格のモデルを見る。多忙生活はなぜ人間の品格を下げるのか。その原因をプラトンの「法律」の祝祭論に求め、祝祭を喪失してしまった現代の人びとの生き方、社会のあり方の欠陥の構図を明らかにする。この欠陥を克服するには、祝祭を再生し、左脳のワークモードと右脳のレジャーモードのバランスを図ることである (生物学と心理学の今日の仮説)。</p>
1 2 日本人の「労働と余暇」の構造 講座人間関係の心理第4巻 職場の人間関係	共 著	1986年11月	ブレイン出版	<p>島田一男監修 松田担当執筆 第4章 日本人の「労働と余暇」の構造 (pp71-90) (内容) 人生80年のタイムバジェット革命によって、21世紀には価値観も、ライフスタイルも労働中心の今日とは全く違ったものとなる。人生観が文化の価値の創造と享受に力点が置かれるようになり、産業化、近代化の過程で家庭生活から喪失していた生活機能が再生し、自立、自助、互助の価値が見直されよう。アートやクラフトのホモ・ファーベル、スポーツを楽しむ存在、読書、学芸を楽しむホモ・サピエンスといった人間を基礎付ける条件整備が課題になってくる。</p>
1 3 「ゆとり」時代のライフスタイル	共 著	1989年8月	日本経済新聞社	<p>共著者 飽戸弘、川上和久 松田担当執筆 第Ⅲ章 新しいライフスタイル10のシナリオ (pp67-140) 第Ⅳ章 新しいマーケティング理論を求めて (pp207-222) (内容) 人生80年時代に向けた「新しい人間、新しい社会」の枠組みを、心の習慣の変遷、幸福感の変遷を辿りながら、所有価値から存在価値への転換という考えを根底に置き構想。次にこの新しい人間、新しい社会」の時代におけるマーケティングのあり方を、大量生産 大量販売 大量消費の mass-marketing, marketing to haveから質を重視した marketing to be へ転換すべきことを、アメリカの古典読書運動を例に引き提案。</p>

著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 エイジレスライフ	共著	1992年12月	丸善株式会社	<p>獨協大学大学広報室 編 松田担当執筆 「人生80年時代のライフスタイル」- 70万時間の人間化に向けて (pp135-167) (内容) 日本のレジャー時代の到来を昭和47年の田中内閣成立のときにおき、それから2回のオイルショック、軽薄短小のハイテクを中心にした産業構造への転換、長期にわたる消費文明の繁栄を背景に置きながら、日本人の生活観、ライフ・スタイル、レジャー・スタイルがどのように変化してきたかを解説。そして、現在の仕事中心の枠組を、70万時間全体の人間化を図るためにいかに改善すべきか提案。</p>
15 レジャー産業を考える	共著	1993年6月	実教出版社	<p>共著者 廻洋子、栗田房穂、水野正人、中田裕久 松田担当執筆 第1章 テーマパークのデザイン視点 (pp1-34) 第2章 ステージⅢのレジャー産業概念 (pp35-66) 第3章 アメリカ・アスペンリゾート研究 (pp67-90) 第8章 クラブ経営の変遷と今日的課題 (pp179-202) 第9章 レジャーの価値と市場創造 (pp203-226) 第10章 レジャー産業政策の課題 (pp227-251) (内容) レジャー産業は「所有価値 (to have) の物の豊かさの追求にあるのではなく「存在価値 (to be) 」を心の豊かさに追求することを支援するもので、その意味において生涯学習支援産業として認識すべきことを提起している。学部生向きの標準的テキスト</p>
16 スポーツ産業論	単著	1996年2月	大修館書店	<p>スポーツ産業とは何か。スポーツ産業はいかにあるべきか。この課題に対する標準的なテキストとして執筆。 情報産業論、自動車産業論などの他産業論を参考に、三つの視点から構成。 第一は、市場構造- 市場行動- 市場成果- 公共政策の「産業組織論(Industrial Organization)」からの視点。 第二は、市場行動に対応する「企業行動理論」と「消費者行動理論」からの視点。 第三は、企業行動に対応する「マーケティング科学」からの視点。 この三視点からスポーツ産業の記述的課題、規範的課題を取り上げている。</p>
17 神々の風景と日本人のこころ- 自然とは、ことばとは、母子の絆とは- (エンゼル叢書1)	共著	1996年9月	PHP 研究所	<p>共著者 山折哲雄 宮田昇 渡部昇一 カール・シュナイダー ヘルムート・ギッパ 久保田展弘 片倉もとこ 松田執筆担当 「見えない価値」の大切さ (pp195-200) (内容) 私たち日本人のこころの故郷はどこにあるのか。宗教学・民俗学・文化人類学の八名の有識者がそれぞれの専門分野から論じたものをまとめ、日本人に無意識のうちに流れる心のふるさについて考え、われわれが大切にしたい生活価値観を探る。</p>

著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18 暮らしの哲学としての生活文化 (エンゼル叢書2)	共著	1997年3月	PHP 研究所	共著者 小塩節 藤原房子 須賀由紀子 松田担当執筆 新「生活文化・生活技術」論(pp129-169) (内容) 時代のキーワードの一つ「生活文化」を学術的に取り上げ、生活文化の思想とその歴史、生活文化の創造に向けての課題などについて論述する。日本において「生活文化」という言葉をいち早く著した三木清の小論「生活文化と生活技術」の全文を所収する。
19 「内なる幸福」を求めて－良きオカルト・良き自由時間の本質－「見えない価値」とは (エンゼル叢書3)	共著	1998年4月	PHP 研究所	共著者 渡部昇一 (内容) 渡部昇一氏と松田による余暇の根源的意味を人間学的に考察した、「人間らしく生きる」ためのヒントに満ちた対話集。時代を超え、洋の東西を越え、人々の心を捉え続ける文芸・芸術の根源にある価値を問い、それを享受するライフスタイルの意味を考える。
20 グレート・ブックスとの対話	共著	1999年 月	財団法人かながわ学術研究交流財団	共著者 江藤裕之 須賀由紀子 松田担当執筆 第1部 21世紀におけるグレート・ブックス・セミナー 第1章「文明の衝突」の投げかけた波紋 第2章グレート・ブックス・アスペン・セミナーの現在 第3章異文化の相互理解と日本の対応 (内容) 当面の問題をふまえながら、同時に、それを全体構造のなかで、あるいは大きな歴史の流れのなかで複眼的に捉える「歴史の眼」を持つことを心がけてきた財団法人かながわ学術研究交流財団による研究研修プログラムの原点とすべく、人類の古典の叡智に学ぶ 古くて新しいこの試みを教育分野において広くシステムティックに行った事例(アメリカの「グレート・ブックス・プロジェクト」)研究に基づいた試みの日本での展開の可能性について、叢書として整理。
21 知性としての精神－プラトンの現代的意識を探る－ (エンゼル叢書4)	共著	2000年6月	PHP 研究所	共著者 渡部昇一 稲垣良典 高橋巖 F.A.ヤンソン 須賀由紀子 松田執筆担当 より善き精神に向けての「幸福追求」(pp208-231) (内容) 人間精神の産物である「言語」とルネッサンスの人間復興を支えた「プラトンの靈魂論」をもとに人間の精神について考察。現代人が重んじる科学的思考の束縛から離れたところに見出される「精神の自由」から心豊かなライフスタイルの創造を考える。
22 聖書の言葉・詩歌の言葉－なぜ人々の心に響くのか－ (エンゼル叢書5)	共著	2001年9月	PHP 研究所	共著者 渡部昇一 K.R.ヤンコウスキー、岡野弘彦 ピーター・ミルワード 稲垣良典 土居健郎 須賀由紀子 江藤裕之 松田執筆担当 岡野弘彦先生による講話ノート(pp210-226) (内容) 人間だけが言葉を有し、それ故に我々は精神を高めることができる。この認識のもと、詩歌や聖書に秘められた言語の内なる力の不思議を問う。精神の芳醇を求めて、現代における「言葉の復権」の大切さを考える。

著書・学术论文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23 スポーツ・ブランド ナイキは私たちをどう変えたのか？	単著	2003年4月	中央公論新社	“Just do it”のキャッチコピーに込められた生活革命の思想とは何か。成功したスポーツ用具メーカーにとどまらず、脱産業化社会のビジネスモデルとしてのナイキの分析・解釈を試みる
24 愛したくなる「家族と暮らし」 (エンゼル叢書6)	共著	2003年5月	PHP 研究所	共著者 天野正子 新村保子 須賀由紀子 松田執筆担当 「野生の時間」からの恩恵(pp185-219) (内容) 人生八十年時代の第一の受け皿である家庭生活・地域生活。現代の多様な価値観の中で、「家族」「家庭」「コミュニティ」という生活の基盤をわれわれはどう形作っていくべきか。「いまわれわれの“家族”はどこにいるのか」そして「どこへ向かおうとしているのか」という問題意識を中心に、これからのライフスタイルを提言する。
25 魔女の文明史	共著	2004年1月	八坂書房 国際日本文化研究センター・プロジェクト	編者 安田喜憲 松田執筆担当 魔女（ヴィーナス）はなぜ山羊（パン）を好きなのか(pp. 181-210) J. M. バリのピーターパンは古代ギリシアの半獣神パンをモデルにし、田園理想郷アルカディアに象徴される人間の自然性の回復、抑圧された非理性の世界と母権性の神々の復権をテーマにしたものであることを、古代から現代までの文学作品を参照しながら検証し、現代におけるレジャー論とレジャー産業の本質を論じる。学生とともに現代のレジャー論を考える際に出会ったピーターパンの謎を、ヨーロッパの博物館、美術館めぐりや研究交流を通じて解明していく過程を描く。
26 古事記が語る原風景 (エンゼル叢書7)	共著	2004年7月	PHP 研究所	共著者 岡野弘彦 渡部昇一 石垣仁久 江藤裕之 須賀由紀子 松田執筆担当 第3部 日本人の心の原風景 始源の旅へのあこがれ—より源流に、より本質に 第六十二回神宮式年遷宮（平成二十五年）に向けて(pp194-214) (内容) 大和言葉の調べが織りなす『古事記』の奥深き世界。好評を博したエンゼル・フォーラムをベースに書下しも加え、＜第一部・『古事記』と日本人＞＜第二部・倭建命＞＜第三部・日本人のこころの原風景＞の三部立て構成。現代へと脈々と受け継がれる日本人の“根生いの心”を考える。
27 甘えと教育と日本文化— — 幼児・初等教育の将来— 日米比較の観点から (エンゼル叢書8)	共著	2005年7月	PHP 研究所	共著者 土居健郎 キャサリン・ルイス 須賀由紀子 松田執筆担当 「甘え」理論の源流について(pp218-249) (内容) 外国人の目から見た「日本の幼児・初等教育が持つ全人教育の良さ」を、長年にわたる教育現場の観察事例を踏まえて浮き彫りにする。それを、日本文化を読み解くキー概念である「甘え」に基づいて理論化し、これからの「子育て支援」の基本理念として提言する。

著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
28 芸術都市の創造 京都とフィレンツェの対話 (エンゼル叢書9)	共著	2006年6月	PHP 研究所	<p>共著者 今道友信 大原謙一郎 岡野弘彦 樺山紘一 高階秀爾 芳賀徹 畑正高 須賀由紀子 松田執筆担当</p> <p>序にかえて フィレンツェに学ぶ 京都ルネサンス運動への期待(pp13-47)</p> <p>(内容)</p> <p>「芸術の都・京都」から「芸術の国・日本」へ。「芸術の京都」と「芸術のフィレンツェ」の対話をもとに、「温故知新」「伝統と革新」の「京都ルネサンス」運動を提言。「経済の国・日本」から「経済と芸術のバランスのとれた国・日本」への転換の行動指針を考える。</p>
29 国境を越えた源氏物語 紫式部とシェイクスピアの響きあい (エンゼル叢書10)	共著	2007年10月	PHP 研究所	<p>共著者 岡野弘彦 ピーター・ミルワード 渡部昇一 江藤裕之 須賀由紀子 松田執筆担当</p> <p>Part3 「古典に学ぶ」ということ- 「根生いのころ」を見つめながら</p> <p>I 「もののはれ・いろごのみ」の文藝復興(pp188-219)</p> <p>(内容)</p> <p>源氏物語千年紀(2008年)記念事業への参加作品として、これまでに開催された源氏物語フォーラムでの発表、対話を中心に構成。東西古典文学の比較研究を通じて世界文学としての源氏物語の魅力に迫るとともに、母語文藝としての作品の重要性を考える。</p>
(学術論文) 1 学習社会に向けて	単著	1987年3月	筑波大学体育科学系紀要 第10巻 (pp. 319-328)	<p>人生80年時代のタイム・バジェットの現状と課題について考察。人生80年のタイム・バジェットは70万時間(24h×365d×80y)。このうち生涯労働時間は7万時間(1800h/y×40y)で人生の10パーセント、生涯自由時間は21万時間で人生の30パーセントになる見通しである(経済企画庁)。このようにタイム・バジェットが変化してくると、仕事人生の充実に加えて自由時間人生の充実が、国民一人ひとりの重要な課題になってくる。そのために、日本人は人生50年時代の労働中心のリニア型タイム・バジェット(児童期Child→教育期Education→労働期Work→隠退期Retirement)から、労働、学習、余暇の柔軟に選択できるリカレント型タイム・バジェット(C→E→[W/E/Leisure]→E/L)を強く望んでいる。タイム・バジェットから見ると、生涯学習社会に向けての条件はできつつある。</p>
2 学習社会に向けてのレジャーの意義	単著	1988年3月	筑波大学体育科学系紀要 第11巻 (pp. 13-22)	<p>語源と社会調査を手懸りにした学習社会に向けての人びとの生き方と社会のあり方の考察。余暇生活に関連するholiday, leisure, schole, otiumの語源を探ってみると、いずれも、人間本来の全体性を回復し、リフレッシュメントを図ることを意味している。しかし、長い間、人生50年時代の労働を通して、経済の価値を最大産出するということで、生き方も、社会のあり方も構造化してきたために、現代人は人間本来の全体性を喪失している。人生80年時代にあつては、全体性を回復する十分な自由時間があり、日本人はそのことに気づき、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」の追求へ、所有価値(to have)から存在価値(to be)の追求へ、生活の力点を移しつつある。</p>

著書・学术论文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 文化の基礎としてのレジャー	単著	1988年V号	筑波大学比較文化会紀要 (pp. 49-62)	ヨゼフ・ピーパーのレジャー論の今日的意義について考察。ピーパーは「ワーク>レジャー」の価値観は、近代社会の労働・産業・経済主義によってつくられたもので、人間の真の幸福は「ワーク<レジャー」の価値観にあるという考えに立つ。なぜなら、レジャーは西洋文化の基礎であるからである。そのレジャーは世俗から時間、空間を切り離しよく本質の見える自由な心の状態（コンテンプレーション）で、祝祭の中で神々と戯れ交わりながら、自由学芸を楽しむことである。人間はこのようなレジャーを通して、人間の全体性を回復し、自己を完成に向けることができる。もちろん、ピーパーは、ワークが人間の生活を基礎付けることを十分に認めた上で、「働くことが人生」という過度の労働観を戒めているのである。今日の日本を含む産業先進諸国において、労働時間は大幅に短縮し、自由時間は十分に増大している。この自由時間を怠惰に過ごさないようにするための理念をピーパーは提起している。
4 Aristotle のレジャー教育論をめぐって	単著	1989年3月	筑波大学体育科学系紀要第12巻 (pp. 1-9)	現代レジャーに哲学的基礎を与えているのは、古代ギリシャの哲学者アリストテレスである。古代ギリシャが自由時間を作り出すために奴隷制度を前提にしたことは、批判されなければならない。しかし、自由時間をコンテンプレーション（ギリシャ語ではtheoria、ラテン語ではcontemplatio、日本語では観想）の心の状態で、自由学芸（liberal arts）を享受し、自己開発を図ることととらえたことには、学ぶべきことが多い。アリストテレスは「幸福はレジャーにあると考えてよい。私たちはレジャーを求めて働く」ととらえ、レジャーにschoolの語源のscholeを、働くにはscholeの否定形のascholiaをあてている。さらにascholiaの生産性を下げないようにする手段として、anapausis（recreation）、paidia（amusement）をあげている。今日の自由時間の過ごし方の①休息休養、②気晴らし、娯楽、③自己開発の3分類を見通していたといってもよい。
5 Seneca のレジャー哲学をめぐって	単著	1990年3月	筑波大学体育科学系紀要第13巻 (pp. 251-259)	セネカのエッセイもレジャー研究においては、近年大きな関心を集めている。レジャーに関するエッセイは、「人生の短さについて」「心の平静について」「レジャーについて」「書簡集」である。現代レジャーの規範を考察したセバスチャン・ディ・グレージアは、このセネカのレジャー哲学を高く評価している。セネカは早くからタイム・バジェットの人間化に関心を寄せ、それには「過去を回想し、現在を活用し、未来に希望を抱いて生きることだ」と説いている。しかし、多くの人はこのことに気付かず、富貴、名声、地位を求め、結局は「過去を後悔し、現在に不満を述べ、未来に絶望した」人生を送っている。

著書・学术论文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 レジャーとしての自由学芸教育	単著	1991年3月	筑波大学体育科学系紀要第14巻 (pp275-284)	<p>モルチマー・J・アドラーの自由学芸教育論の考察。今世紀の産業化のプロセスの中で、労働生活が過度に重視され、人間の価値観、ライフスタイル、社会のあり方がすべて労働に従属するようになってしまった。このために産業社会の教養に裏打ちされたシステムは、職業教育重視、専門教育重視で、現代人の全体性をすっかり喪失している。</p> <p>しかし全体性を喪失した人びとからなる社会は異常であり、これを救うには時代、社会、民族を超えて、人間に共通する傾向、能力を開発する自由学芸教育を重視することである。それも生涯にわたって、その機会を開くことのできる、生涯学習社会をめざすことである。</p>
7 高齢期における余暇生活に関する研究	単著	1992年3月	長寿科学総合研究費 中央事務局 「長寿科学総合研究」 厚生省厚生科学研究費補助金 (pp235-240)	<p>日本の高齢期における余暇生活は、欧米に比べ、意識の面でも、また実際の習慣化の面においても、非常に立ち遅れている。意識と実際の両面で高齢期になると、余暇活動が消極的であるにもかかわらず、それを肯定する傾向が強い。欧米の高齢者が積極的で且つ肯定的であるのと対称的である。</p> <p>今後、高齢期の余暇生活の質を向上させるためには、40代くらいから自己開発に結びつく余暇生活に動機付け、技術・方法を身に付けさせ、習慣化させる支援システムづくりが急務である。余暇開発センターの「7カ国比較国際レジャー調査'89」データの分析をもとに、問題の実態把握と問題解決の方向を探っている。</p>
8 CHANGING JAPANESE ATTITUDES TOWARDS LIFESTYLES AND LEISURE 1970-1990	単著	1992年4月	JAPANSTUDIEN Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien der Philipp - Frau - von - siebold-stiftung (pp127-137)	<p>総理府の時系列データ「国民生活に関する世論調査」を参考に、日本人の生活意識、衣生活、食生活、住生活（耐久消費財を含む）、レジャー・余暇生活に対する嗜好が、1970-1990年間にどのように変遷したかを、社会心理学、社会学、消費経済学の視点から考察。日本人の生活意識の重心は、1979年に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」の追求へ移り、この傾向は今日までさらに強まっている。このことは日本人の近代化を支えてきた幸福感（Happiness=Material Consumption/ Desire; サムエルソン）ではなくなったことを物語っている。さらに1983年からは、生活の第一力点がレジャー・余暇生活に移っており、これも今日まで強まっている。これは、生活全体のレジャー化、生活文化化を促している。</p>
9 レジャー・カウンセリングの応用可能性	単著	1993年3月	長寿科学総合研究費 中央事務局 「長寿科学総合研究」 厚生省厚生科学研究費補助金 (pp139-146)	<p>高齢期に向けてQOL (Quality of Life) , QLL (Quality of LEISURE LIFE) の向上をいかに図るべきか、を扱ったレジャー・カウンセリングに関する考察。国際比較調査（日本、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、西ドイツ、オーストラリア 余暇開発センター）の1992年度分析結果を基に、人生80年70万時間の人間化に気付きと動機を与え、人間化を図る技術方法を修得させるレジャー・カウンセリングの理念、実際の方法についての基本デザインを試みた。具体的には生物的にニーズに対応する健康な食習慣、運動習慣、休養習慣への気付きと動機付け、文化的ニーズに対応するレジャー活動への気付きと動機付けの考え方と方法をデザインしている。</p>

著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 人生80年時代の教育・労働・余暇 - Time Budget 政策の視点から -	単著	1998年4月	実践女子大学生生活科学部 紀要No. 35 (pp1-8)	人生80年、生涯学習時間に換算して70万時間。この70万時間の人間化(humanization)をいかにかはるか。先進諸国のTime Budget政策の動向、ILOの同行、そしてOECDのRecurrent Time Budgetプロジェクトの理念と方法を調整し、経済企画庁を中心に下、日本の「人生80年時代の70万時間の人間化」政策をいかに進めてきたかを回想。
11 Work & Leisure について	単著	1999年4月	実践女子大学生生活科学部 紀要No. 36 (pp109-114)	一般には、workdaysは「onの日」で、holidayは「offの日」であり、また、workに対し、nonworkがleisureと受け止めている。しかし、古典的leisure観はすべてこの逆であった。 そこで、①holidayの語源、②プラトンのプレイ観、③部分(work)と全体(leisure, holy life)、④アリストテレスのレジャー(schole)観、⑤現代マスレジャーの課題について対話資料を整理した。
12 幸福概念と追求方法について - 基本的人権「生命・自由・幸福の追求」 -	単著	2000年4月	実践女子大学生生活科学部 紀要No. 37 (pp139-147)	M. J. アドラーのGreat Booksの「幸福(happiness)」の概念(idea)を参考に、生活文化史専攻のゼミ生たちと、90分3回の対話(dialogue)を行い、その考え方、セミナーの実際、成果についてまとめたもの。日本国憲法第13条基本的人権で、幸福の追求を明記しながら、憲法学者も教育者も「幸福」に関する教育をなおざりにしてきたきらいがある。物から心重視・追求の時代を迎えている今日、この問題をどのように扱うべきかを検討したパイロット論文。
13 脱産業社会に向けての課題(I) - レジャー研究の自分史 -	単著	2001年4月	実践女子大学生生活科学部 紀要No. 38 (pp1-15)	これまで幾度となく、未来の社会では、レジャー問題が重要になるだろうと、と提起されてきた。しかし、そのたびに、未来の社会でも、今まで通り、労働問題がレジャー問題よりも重要であり、レジャーはあくまで、急速・休養、気晴らし・娯楽の人生のつけたしでしかないとあしらわれてきた。特に日本ではバブル経済が崩壊してから、レジャー問題がすっかり鳴りをひそめ、1970年代、80年代、その重要性を華々しく提起し続けたシンクタンク・余暇開発センターもその看板を2000年に降ろしてしまった。 それでは本当に未来の社会において、レジャー問題がその重要性を失ったのであろうか。私はそうは思わない。すでに日本人の価値意識、ライフスタイルは、物の豊かさから心の豊かさへ、生活の第1の力点がレジャー・余暇生活へ変化している。「レジャーとはなにか」「レジャーはいかにあるべきか」を、国民一人ひとりの課題として問い続ける価値は充分にある。 私自身のレジャー研究の自分史を振り返り、レジャー問題の重要性を再度提起したいと思う。
14 脱産業社会に向けての課題(II) - レジャー研究の自分史 -	単著	2002年4月	実践女子大学生生活科学部 紀要No. 39 (pp40-57)	余暇開発センターの私たちの研究グループが、脱産業社会における社会経済理論について、どのような検討を行ったかを回想したい。最初に、新しい社会経済理論を必要とした現代レジャーの政策課題を振り返り、次に、時間配分の経済学、レジャー・エコノミクスを取りあげる。

著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 5 脱産業社会に向けての課題 (III) - レジャー研究の自分史-	単 著	2003 年 4 月	実践女子大学生生活科学部 紀要 No. 40 (pp82-97)	日本社会はバブル経済崩壊後の長びく不況に苦しんでいる。考え得るすべての政策を講じても、不況を抜け出せずにいる。いかにすればよいのか。これまでの政策をレビューしまだ1つだけ考えられていない政策がある。それは時間配分の政策である。余暇開発センターの1973年の研究プロジェクトを振り返り、現在、日本社会が取り組んでいる構造改革に、時間配分の政策視点をつけ加えることを考察する。
1 6 脱産業社会に向けての課題 (IV) - 「レジャー概念」検討の自分史-	単 著	2004 年 4 月	実践女子大学生生活科学部 紀要 No. 41 (pp55-80)	余暇開発センターの私たちの研究グループは、1974年11月の産業構造審議会余暇部会が答申を出し終わると、引き続き1975年4月から5年にわたる基礎研究プロジェクトの「新しい人間、新しい社会」をスタートさせることになった。このプロジェクトの意図は、人文、社会、自然の学問領域から学際的に、現代レジャーの現状と課題を検討し、将来ヴィジョンを構想することにあつた。初めに私たちはヴィジョン作りに入る前に、十分にレジャーの本質について研究することにした。なぜならば、余暇部会において十分に検討できない課題であつたからだ。私たちはまず先送りしたセバスチャン・ディ・グレージアとヨゼフ・ピーパーの文献の検討から始めた。この2人の研究者は古代ギリシアのアリストテレスのレジャー哲学思想の現代的意義を高く評価していたからである。そこで私たちの研究グループもアリストテレスの文献の読み込みの同じ追体験を行うことにした。このたびの「レジャー概念」検討の自分史は、その追体験で考察したことの回想である。
1 7 脱産業社会に向けての課題 (V) - 「日本人の生きがい構造」研究の自分史-	単 著	2005 年 4 月	実践女子大学生生活科学部 紀要 No. 42 (pp130-145)	1976年4月にベルギーで開催された国際レジャー会議からは非常に参考になることを得た。今後は労働からレジャーへと軸足を移そうという段階にあつて、レジャー問題の核心が、労働問題、労働に人間化と表裏になっていることが理解できたからである。会議の中心課題は「自由時間と生きがい」であつたが、余暇開発センターでも、「日本人の生きがい構造」の研究を進めていた。中でも、神谷美恵子、島崎敏樹、両教授の「生きがい」構造論を紹介し、労働生活と生きがい充実度の関係、および国際会議のレジャー憲章提案を報告する
1 8 脱産業社会に向けての課題 (VI) - 「余暇行政」研究の自分史-	単 著	2006 年 4 月	実践女子大学生生活科学部 紀要 No. 43 (pp72-91)	バブル経済崩壊後、余暇行政は話題にすらならなくなった。政府のどの官庁も、また都道府県も、市町村も、余暇行政を表舞台からすっかり降ろしてしまった。しかし、あの石油危機以降の大量失業問題に直面した欧米諸国はその逆であつた。余暇行政のタイム・バジェット政策に失業救済の活路を見い出そうとしていたのだ。先進諸国病とまでいわれ、沈滞化した人びとの生き方、社会のあり方を、生活時間資源の配分制度を柔構造化することにより、活性化を図っていたのだ。日本社会が当時の欧米諸国のこの知恵に学べば、今日の閉塞感を打開する新しい政策を見い出せるはずだ。実はその知恵については、1980年代の経済企画庁は十分に調査研究を行っていた。私自身が1972年の余暇開発センターの設立以来、経済企画庁の余暇行政の仕事に参加してきただけに、せめてこの期間のあるべきだった余暇行政の姿を回想し、記録しておきたいと思う。

著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19 古代母権制社会研究の今日的視点 - 神話と語源からの思索・素描 -	共 著	2007年4月	実践女子大学生生活科学部 紀要No. 44 (pp73-100)	共著者 江藤裕之 実践女子大学生生活文化学科では、平成19年度から新たに「女性社会論」、「女性社会論演習」の科目開設を予定している。その開設に向けてのプレ授業を、2年前から「生活文化史演習」と「卒業論文演習」の中で行ってきた。この講義内容に関連し、同じ問題意識を持つ長野県看護大学の言語学・比較母語学の江藤研究室に協力を求め、インド・ヨーロッパ言語文化圏の祖語・祖宗教の側面から共同研究を進めてきた。2006年10月2日に、同大学にて教員を対象とした中間研究発表会が開催され、学際的な立場から助言を受けることができた。本稿はその時の内容をもとに加筆修正を行ったものであるが、論文としてはまだ中間段階である。インターネット上でも公開し、多くの助言、批判を受けながら、完成論文に仕上げていきたい。
(その他) 1 国際会議プロデュース 1) 筑波会議 2) 国際価値会議 3) 国際経営経済会議		昭和52年～平成2年の間	筑波大学	筑波大学 広報室員・公開室員として国際会議の誘致、実行をプロデュース。筑波会議5回、国際価値会議5回、国際経営経済会議4回の開催をプロデュース。
2 地域振興イベント・プロデュース 1) 奥の細道300年祭 2) 出羽三山開山1400年祭 3) フジ・ワールド行動計画 ほか		平成元年～平成5年 昭和60年～平成2年	山形県 山形県 静岡県・財団法人 静岡総合研究機構	地域振興計画・プロジェクト・イベントの推進にあたり、プロデューサーとして参画。
3 グランド・デザイン 1) 湘南国際村 2) 文学の森 (三島由紀夫館、徳富蘇峰館) ほか		平成6年開村 平成10年オープン	神奈川県 山梨県山中湖村	地方自治体が取り組む地域振興・住民サービス等の向上並びに文化的価値向上を目指す施策に関するグランドデザインを担当。